

---

# みこみこ

葵夢幻

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

みこみこ

### 【Nコード】

N6706C

### 【作者名】

葵夢幻

### 【あらすじ】

岩城神社で働く巫女二人、そんな二人の日常のページ

「うおりやああー！！」

掛け声と共に気合の入った美羽のドロップキックが優衣に炸裂。優衣はそのまま倒されて美羽は華麗に着地する。

そして美羽はまだ倒れている優衣にの元へより、胸襟をつかんで無理やり立たせる。

「あんた、今何してた？」

凄じ剣幕で問いただしてくる美羽を目の前にしたらもう笑うしかないのか、優衣は笑って誤魔化そうとする。

「はあ、まったくいつもこいつは。」

「優衣、あなた自分の職業を言ってごらん」

「ほえ？」

「ほえ、じゃなくって」

「え」と、一応、巫女さん」

「一応じゃなくても、あなたは巫女なの」

「あははっ、そうだね」

「っで、今あなたがやるべき仕事は？」

「……境内の掃除」

「そうね。じゃあ、なんで境内で近所の子供たちと野球をやっているのかな？　しかも箒をバットにして」

「またしても笑って誤魔化そうとする優衣に対して美羽は大きな溜息を付いた。」

「まあ、美羽の気持ちも分からなくも無い。なにせ優衣は仕事をサボって近所の子供たちと野球をやっていたのだから。」

「こっちは一生懸命に仕事してるのにこいつは！」

「じゃ、そんなワケで、このお姉ちゃんには仕事が残ってるから、あなた達は他の場所で遊びなさい」

「えっ、と不満を垂らす子供達だが、美羽は優衣を前に突き出し

「こうなりたい？」と脅迫染みた言葉を口にする。

思わずひるむ子供達。けどそれもしかたない、今の優衣は先程の攻撃で背中に優衣の両足の跡がはつきりと残っており、しかも倒れた時に転がったので全身が汚れている。

「じゃあ、美羽姉ちゃん。またね〜」

「つて、ちよつと待つて、そんなにあつさりと見捨てないで！」

あつさりと引き下がる子供達にまだ泣きつこうとする優衣を引きずり、美羽は別の場所へと移動する。

「まったく、ちよつとぐらいいいじゃん。あの子達がまた遊ぼうつて来たんだから」

優衣は巫女装束に付いた土埃を払いながら、美羽に文句言い出す。

「つで、自分の仕事を放り出して遊んでたわけだ」

「放り出してないよ。ちよつとした休憩だよ」

「あんたの休憩は箒で野球をすることか」

「まあ、気分転換ということだ」

「いや、もういいから素直に謝れ」

「すいませんでしたー！」

あつさりと白旗を上げる優衣。そんな優衣を見て美羽は「うんうん」と勝ち誇ったように首を縦に振る。

「はい、素直でよろしい」

「でもさ、純粋な子供達に遊ぼうつて見つめられると断れないじゃん」

「その前に己の本分をわきまえろ」

「いや、違つよ、そうじゃないよ。なんて言うか、私は子供達の純粋な目に弱いんだよ。まるでこつ、捨てられてる子犬が拾ってくれないかな、拾ってくれないかなって目で訴えているようで」

「あの子供達はそこまでピンチなのか？」

「うつ、いや、あの…」

「なあ、いいかげん、自分の非を認めないか」

「いやゝ、分かってるんだけどね。いざ誘われると断れなくて」

「本当に誘惑に弱いな、あんたは」

「あははっ」

やっぱり最後は笑って誤魔化す優衣を美羽は呆れた目線で見ていた。

はあ、やっぱり最後はこれが、こいつは。

「はいはい、じゃあそろそろ仕事に戻りましょう」

「そうだね。じゃあ、境内の掃除を…」

「ちよつと待て、境内の掃除は私がやる。だからあんたは社務所を手伝え」

「えゝ、なんで？」

社務所の仕事がつぼど不満なのか優衣は不満を漏らす。

そんなに社務所の仕事が嫌なのか、こいつは。

「なんで社務所が嫌なのよ？」

「だって、伝票整理とかの単純作業ってつまらないし、眠くなるじゃん」

「一応言っておくが、あんたはこの岩城神社の巫女として雇われており、神社の仕事をする義務があるんだぞ」

「だから境内の掃除を…」

「あんたはさつき境内の掃除をサボってただろ」

「今度はちゃんとやるよ」

「つい先程までサボってた奴の言葉を信じると？」

「ぐっ！」

さすがにそれを言われては言い返す言葉が無いのか、優衣は泣きそつな表情を浮かべて美羽に訴える。

「はいはい、じゃあ私は境内の掃除をしとくから、あんたもちゃんと社務所にいきなさいよ」

優衣の訴えを美羽はあっさりとスルー、箒をかつさりいそのまま境内へと向かっていった。

ぐっ、けど自業自得な分だけに何も言えない自分がちょっと悔しい。

結局、優衣はとぼとぼ社務所へと向かった。

それから数時間後、境内の掃除を全て終えた美羽は社務所へと戻った。

「境内の掃除、終わりました」

社務所に入った美羽を岩城神社の神主、大輝が「お疲れ様」と迎え入れる。

「美羽、お帰り」

美羽はそのまま優衣のところまで行き、ちゃんと仕事をしているのかを確かめる。

「おっ、今度はちゃんと仕事をしてるみたいね」

「うっ、さっきのはたまたま誘われただけだよ」

文句を言いながらも優衣の手は止まらず、そのまま作業を続けている。

「けどさ、こうやってると思うんだけど」

「何よ？」

「なんでこういう単純作業って眠くなるんだろうね。さっきからもの凄い睡魔が」

「睡魔って、おまつ、ちゃんと仕事してるんだろうな？」

「うっん、多分大丈夫」

「多分じゃなくて、ちゃんとやれよ」

「あははっ」

はい、いつもどおり最後は笑って誤魔化しました。

「けど、私なんて単純作業ほど集中できるけどね」

「やっぱり、人によって違うのかな？」

「その前にお前のやる気が問題なんじゃないか」

「ふっふっふっ、美羽さん、そいつはちよっと違いますよ」

「じゃあ、何なのよ？」

「私の場合は集中しすぎて途中で精神力が尽きるんですよ」

「結局ダメじゃない、それ」

「けど、何かやりきったって思わない？」

「思わないわよ！」

「というか二人ともそろそろ仕事に戻ってくれない」

『はい、すみません』

大輝の注意に二人は声をそろえて誤ると、それぞれ自分の仕事へと戻っていった。

結局、こんな感じで岩城神社の毎日は過ぎていくのだった。

（後書き）

なんだろう、何か巫女ネタが続いているような気がするけど、そんな事をまったく気にしない、巫女萌えの葵夢幻です。

今回は楽しい巫女の日常をテーマにして書いてみました。けど、実際にこんな二人が居たら面白いだろうな。

そんなワケで、ここまで読んでくださり、ありがとうございます。そしてこれからもよろしくお願いします。

以上、葵夢幻でした



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6706c/>

---

みこみこ

2010年10月8日15時49分発行